

恋人は 女神さま



小説 空蝉

挿絵 浅沼克明

立ち読み版

プロローグ

一日目 空から天使が舞い降りた

二日目 居候女神様×3

三日目 縮まる距離

四日目 皆の決断

五日目 幸せな生活

エピローグ みんなが笑顔でいるために

登場人物紹介

Characters



ブリュンヒルデ

優希の前世である神様と婚約していた女神。おっとり天然な性格で誰にも分け隔てなく優しく接する。愛称はヒルダ。

ヘル

死者の国を統べる女神。率直な物言いをするが、心を読み取る特殊能力を持つため、人の心情に誰よりも敏感。

スクルド

ブリュンヒルデを「お姉さま」と慕うロリッ娘女神。一途で思い込みが激しく、また、好奇心が強い。

こんどうゆうき 近藤優希

両親の不在中に家業の酪農を任されたごく普通の学生。とある神の生まれ変わり、三人の女神たちとともに暮らすことに。

甘酸っぱい香りと蒸れた熱気とに誘われるがまま顔をさらに近づければ、鼻先にムニユリと複雑に折り重なった肉の唇が押し当たった。

「んく……こ、こら。そんなにくつついたら、く、くすぐった、アアアッ……」

腰をモジモジと揺すり、うっとりとした声音を漏らしてくれているのを聞きながら、伸ばした舌でわずかに開いた肉色の唇をなめしゃぶり、いっそうくつるがせる。ふつくらと熟れた女神の股間に唇を押しつけもみほぐせば、すぐさまトロリと甘酸っぱい蜜汁がこぼれてきて、舌先を滑り喉下へと流れこんできた。鼻先をくすぐる恥毛の柔らかさがたまらなくくすぐったく、なのになまらなく心地がいい。

「あくっ！ あっアア……っ、そ、そお、そこおっ……」

（こころへんとか……奥のほうをなめたほうが、悦んでくれてる……っばいかな）
ちゆるっ、ぴちゃ……れるるうううっ……。

唇を股間に張りつけたまま上目遣いにヘルの反応を確認し、入り口付近から徐々に奥へと差し入れた舌先でぬかるんだ肉穴のあちこちをまさぐり、時折ツンツンとスジを突ついて刺激する。敏感に震えるたびに染み出す甘酸っぱい蜜汁をゴクゴクと、あふれる傍から飲みこんでいった。

「はう……も、もう準備はできてる、から」

「ちゅぶあ……っ、え……っ？」

酸味の強いヘルの蜜をもっと味わっていたい。その一念で舌をより奥へと潜らせかけた

矢先に、白い指先に額を押されて引き離されてしまう。

一瞬なんの準備かと迷った拳句、ようやくのぼせ上がった頭で理解した。ここにきてようやくくまじまじと眺めることのできたもじつく女神の股間は、ほんのり火照りを帯びて桜色に染まり。開閉を繰り返す淫唇から、トロリと濃い蜜液が染み出している。

牡を迎え入れるための準備は、もうとつくに終わっていたのだ。

(う、そっか……ヘルを焦らしちゃったのか……)

少年がドギマギと戸惑ううちに、とうとう耐えきれなくなったのか。凜々しく切れ長を保ってはいるものしきりにまなじりを震わせながら。

「は、早くっ……私の中に熱いものを……優希の硬いのが、ほ、欲しいのっ……」

ビブラートの利いた女神の声が、浴室内に反響する。潤んだ瞳で見下ろす彼女の濡れた唇から、自然とおねだりがこぼれ出た。きよろきよろとせわしなく、恥ずかしげに女神の瞳が揺らめいている。

ひょっとして実直な彼女なりに「イヤらしい言葉」で誘ってくれたのではないか――。そんな風に考え至ってしまうと、もう抑制など効くはずもなかった。

「立ったまま……アソコの中心に優希のを押し当てて……アッ！ そ、そのままあつ……」
湯船から立ち上がれば、勃起した股間が丸見えになってしまう。けれどもう、恥じらう余裕すらない。

「え、えっと、こ、ここ……かな。ん……っ」

膝立ちで高さを合わせてくれているヘルのスカートを少し焦り気味に左手でめくり上げ、露わとなった柔らかな下腹に右手を添える。はつきり目にしてしまえば心臓が破裂してしまいそうで、あえて彼女の股間は正視しないように心がけ。

緊張と昂揚で高鳴る自分の心拍をうるさく感じながら、腰を思いきって突き出し、肉槍の先を彼女の濡れた秘唇へと押し当てた。

にゆるんっ……。

「うあっ……！ す、滑っ……先っ……ぼっ！ つ、くアア……！」

湿気と蜜汁とでベトベトの、絶妙な曲線を帯びた女神の下腹部はよく滑り、何度も摩擦でくすぐられた亀頭はジンジンと甘い痺れに身悶えて、その都度腰ががくりと碎けかけた。このままでは、挿入を果たす前に欲望を吐き出してしまいかねない。焦るほどに、丸い切っ先と、ぬかるむ肉の扉はよく滑り、強く擦れあつては熱くたぎる情欲をドクドクと肉の幹に送りこんでくる。

ぬぢゅっ、にゅぢゅるっ！ にゅづるんっ！

「くひう！ こ、こら優希いっ……早くっ、遊んでないで早くっ、お、奥にいっ……」

ずっ……ぶぢゅうううううううううう！

「あひゃッあッあああああ——っ!?」

続けざまの、ヘルの絶叫に耳朵が痺れる。なにか、薄い膜を押し破るような感覚とともに。



「くう、おッ……は、入ったああ……ッッ！」

ようやく先端がぬかるんだ窪みを捉えた途端。焦らしに焦らされた肉のヒダが、幾重にも折り重なって幹へと吸いつき、波状に責め立ててくる。悦び勇んで震える肉の歓待に、童貞卒業の余韻を味わう間もなく。

「あ……ああうううっ！ な、んだっこれえっ！ んっんんううう！」

視界の片隅で、痛みを堪え恍惚に震える女神の表情を捉えた途端。腰の根本から背筋までゾクリと駆け抜ける解放感に腰が跳ね上がる。

どくッ——。抉るようにつきつく肉ヒダを突き上げ、みっちり詰まった肉の締めつけに溺れ、腰が溶けてなくなりそうなほどの言い知れぬ解放感に酔い痴れた——。

「う、あっ……」

中に出してしまった、だとか。いくらなんでも早過ぎる、軽蔑されてしまうのではないか、などといったことよりも先に。ただ、管の中の一滴まで搾り取られるような締めつけと、ねっとり潤んだ肉穴に浸ったまま、安堵と昂奮が混じる中で欲望を放出する悦びにドブプリ溺れる。

「ふあ……あっ、ひあ、んッ……焦らしたくせに先に一人でイクとは……あんっ。仕方のないやつ……ひああっ、ああんっ濃いッ……」

つながる女神の悩ましげな声と、身悶える黒ドレスの奥の肢体とに、射精の歓楽に呑まれかけていた意識をゆっくりと引き戻された。

「…………ご、ごめんっ…………ヘルっ…………」

ハッとして謝罪の言葉が口から漏れたのは、たつぷりと白い欲望汁を収縮する膣内へと吐き出しきってしまったから、さらにしばらく経ってのことだった。

「ん…………？ 怒ってなどいいないぞ私は…………。人の身体を得て、もう一度お前にすべてを捧げられたのだから…………」

けれどポニーテールを揺らしてかぶりを振る女神はわずかに腹を波打たせながら微笑をこぼし、うっとりとした声音で牡の制服欲を満たしてくれる。

「っふう、ふふ…………それに…………」

きゅきゅきゅうっ。

「あひっ!? きゅ、急にきつくっ!」

「まだ…………十分に元気なよう、んっ…………だしな、お前の分身は。はっ、あはああ…………」

すでに腰元でよじれ、胸元も股間も隠せないでいる黒いドレスの下で、引き締まった腹筋が懇願するかのようにヒクヒクと、艶かしく波を打つ。同時に圧力を加えられた牡肉が、胎内で一向に萎えぬ硬度のまま悦びに震えて、すがりつく膣肉に振動を伝えた。

(ううっ…………牛たちも搾られる時ってこんな気持ちなんだろうか…………)

埒もない夢想が脳裏をかすめ、再びこみあげた射精欲を堪えるように。壁のタイルに背を預け反ったおかげでよけいに大きさが強調された女神の、丸く豊かな膨らみへと無意識に両手を伸ばす。

「ん……乳が欲しいのか？ さすがにまだミルクは出なっ……やはああんッ！」

牡の精を浴びてうねりの増した膣内の蠢動に、負けじと肉の幹を膨らませ、先刻の失態の分を取り戻すべく奮起して根本から二つの膨らみを絞り上げる。

「ぢゅぱっ！ ぢゅっぢゅぢゅぢゅううう……！」

ひしゃげた乳肉の卑猥な姿によいよ我慢が利かなくなつて、中心の突起ごとカプリと啜え、むしゃぶりついた。

「こ、こら、あッ……。そんなにがつつくやつがある、かつひやあうううっ！」

充血して硬くなっている女神の乳首をコロコロと転がせば、ヘルの下腹はよけいに波打ち、キュウキュウと牡肉を締めつけてくれる。

「ぢゅぶあ……！ はあ、ああッ……ダメだ、抜けちゃ……あくううう！」

圧力に押し負けた肉棒がぬかるんだ膣道をずり下がるのを、腹に力をこめて押し戻せば、みるみる若い牡肉は硬度を取り戻し、再び膣内を突き上がる。

——ずぶぢゅッ！

「くひやあああああ！ い、勇ましいにもほどがあるつうううッんうンン……♥」

クラクラと、頭の中がかかすんで揺らぐ。湯船の中で滑りかけた足元に踏ん張りを利かせ、何度も、何度も腰を突きこんで奥底で震える女神の子宮を打ち叩いた。

（はあうう……すげえ、ちんこの先が痺れる……！）

「あはあうっ！ うく！ くうんッ……急に激しくする、なんてえっ……ほんと、うに

っ！ 仕方のないっ、やつっ、はっひいんっっ！」

射精直後の敏感な状態がまだ続いていて、肉の唇でしゃぶられる根本にはジーンと熱い塊がとぐろを巻き居座っている。

腰と腰を、へそがくつつくくらいに激しくぶつけあえば、波打つ湯船から跳ねた水飛沫が、ただでさえグチョグチョに濡れそぼる男女の結合部に散って弾けた。吸った水滴をしつとりと滴らせる薄紫の恥毛や、抽送のたびに手の中でプルプル弾むひしゃげた乳房。見る物すべてが官能を煽り立て。

「ああうっ、いい、ぞっ……ゆう、きいいっ……勇ましい腰使いつ、んっ！ あふあ！」
キツキツに締め上げてくる膣のぬかるみと指に吸いつく乳肌の心地よさ——ヘルの抱き心地に心身ともに籠絡カウラクされてゆく。甘く蕩けた声音に耳朵を灼かれ、不覚にもゾクリとし肉棒の先から濃い目の先走りを噴き漏らしてしまう。

情けないことに、嘔み締めた歯を緩めればすぐにでも二発目を暴発しそうな有様だ。
(で、でも今度は、今度はヘルも一緒にっ……！)

「あ、ああ。一緒に……お前と一緒に果てさせて、ふあ、ああんッ、ほ、欲しいいいっっ！」
かぶっ——。甘くふやけた声を隠したいがため。嘔みついた女神の唇に耳たぶを食まれ吐息でくすぐられて、また一段。少年の儂い抵抗は削がれ、肉棒に溜まる欲望は幹を歓喜に震わせ先端へと駆け上がる。

「ぢゅうっ！ んぶあ、ちゅっちゅづるるるっ！ ヘルの乳首、もうこんなにっ……！」

硬くしこる乳首を乳輪ごと口に含んで、舌先で何度も小突く。時折緩急をつけ、丸めた舌で乳房の中に押しこむように潰して、経験で上回るヘルを熱意で追いこんでいった。

「も、もつと奥にッ……子宮に先っぽをおつ……きゃあうんんッッ！」

ぢゅぽんッ！ ぐぼつぢゅぶぢゅッ！ ぶッ……ぽんッッ！

根本までゆつくりと、すぎる肉ヒダの蜜で濡れ光る幹を引き抜き、間髪入れずに一気に潤みきった蜜壺へ再度こじ入れる。ヒクヒクと悶える肉ヒダに望まれるまま、奥行きのある腔内を蹂躪し、最奥で縮こまる子宮口を限界間近の肉先でしつこくノックし続けた。

打ちつけるたびにヘルのくびれた腰は浮き上がり、その上で焦れたようにくねって、また熱烈にぎゅつと牡肉に纏わりついてくる。

コリコリとした触れ心地に痺れる先端と、突きこみのたびに粘り気と熱気の増す肉粘膜にびっちり押し包まれた幹とが、ドクドクと情欲のたぎりをあふれさせようとしている。

「お、俺またっ、も、もう……ッ！」

のぼせかけの頭の中で白熱が弾けるのをグッと堪え、喘ぎに喘いで抱きつく女神へと限界を伝えた。

「だ……じょう、ぶっ！ わた、しもつ、もうすぐ……だからあつ、遠慮しなくていいつ、からあああッッ！」

片足を上げて腰に抱きついてくる女神様の、ねだるように絡みつく肉壺内部で牡の鼓動が跳ね上がる。引き寄せられた腰の中心で、ドロドロに煮えたぎった子種が、女の胎の中

を征服する悦びにいつそう湯だつて輪精管へと充填された。

(ああつ、抱き締めたいつ！ ヘルの声聞きながら出したら、きつと気持ちいい……！)
吸いつくような乳肌を思う様もみ潰して、食い締めた歯先を開きヘルの乳首を左右交互に甘噛みする。

「あくウツ！ そつ、そんないつぺんに責められたらあつあひいいつ！ 幸せな気持ちに、あたたかな気持ちにつ、な、なるウウ……！」

もつと、もつと甘い声で啼いて欲しい。聞きながら、果ててしまいたい。間断なく湧き起る情欲の深さに我ながら驚かされる。それだけ目の前の凛々しき女神様をドロドロに溶かしてしまいたい——そう思っているのだと実感した。

ばぢゅウツ！

「ふあんつ！ あうつ……」

ぶつけた腰の勢いに負けたヘルが足を滑らせて転びそうになるのを、左手一本。乳肌から名残惜しく離れた片手で尻肉ごと抱きかかえ、引き上げてやる。

ずぶうつ！

「やあはッ……！ ふ、深いいいつ！ 子宮につあ、当たるううつ！」

抜けかけた肉棒が勢いよく奥の弾力ある壁を打ち叩き、女神のおとがいを大きく反らせた。熱くぬかるんだ膈内に戻るや否や、外気に晒され冷やされた砲身をビクビクと身震いさせて、牡の象徴は己の陣地に戻った悦びを、噴き出す先走り汁という形で吐露していく。

(……下着の中も、見たい！)

組み敷き抱き締めた二の腕の柔らかさ、もみ潰した爆乳のふかふかとした弾力。さらに鼻先に香る日光のにおいと数分前まで重ねあっていた唇の余韻とが、こぞって若い牡の昂揚を誘い、さらなる欲求を引き出させる。

「え、えっと。こうするのが、いいんですよ……ね？ んっ、んうう……」

硬く突つ張るズボンの前を二日前の夜と同様、立てた膝でグリグリ真下から刺激された。驚きで見開いた目に飛びこんできた女神の柔らかな微笑に、嬉しさと愛しさが入り交ざる。「うあっ、うんっ。それ、すごく痺れてっ……いいようっ」

ジンジンと甘く痺れた肉幹が、窮屈なトランクスの中で悶えながら先走りを大量にこぼす。ドロドロになった下着の心地悪さに身じろぎしつつ、少年は自分のものを下ろす代わりにチラチラ揺れる女神の純白ショーツへと手をかけた。

「やっ、あ！ 優希さっ——」

少年の身体の真下で、あわてたヒルダの手が下着を押さえるよりも早く、ズリリと純白レースがずり下がる。めくれた股布にはベトトリと蜜液がこびりつき、濡れて光る肉の丘との間で何本も糸を引く。

「う、わ……パクパク、してる。それにすごい、濡れてるよ？ ……こんだけ濡れてたら結構心地悪かったでしょ？」

荒ぶる吐息と、震える声を抑えられない。まるで肉の花が咲き誇ったかのように縦スジ

はほころび、ヒルダの呼吸に合わせて丸みを帯びた肉丘が弾むたび、ぼつてりと肉厚の唇を開閉させている。組み敷く女神の肩を押さえ、視線を目一杯下げて見た女神の股間は、想像以上に淫猥な造形でもって少年の心に衝撃と驚愕、そして底なしの昂奮をもたらした。

「あッ！ あまり、じつくり見ないで……は、恥ずかしいですっ……ふぁ！」

のしかかる若者の体軀に押さえこまれて焦る肉丘の上部で、濡れて左右に分かれ張りついていた栗毛色の恥毛がもじつく内腿の動きに合わせて、剥がれてゆらゆらとそよぐ。ぴつちりと閉じた、ヘルのものよりも未成熟に映る割れ目からは太ももを伝うほどの蜜汁が垂れ落ちて、くつつかんばかりに接近した牡の、隆々と張った股間のテントまで湿らせた。ぬめり気に対応するように亀頭がビクリと跳ね、またトランクスの中で粘ついた濃厚カウパーが漏れ出してしまふ。

垂れ目がちの大きな碧眼をますます垂れ下げ、今にも泣き出しそうで——なのに、頬は赤らんで、濡れた唇がたまらなく牡の視線を惹きつける。見ないでと請われるたび、もつとじつくりと見つめていたくなる。ごくりと生唾を飲んで、もう一度。

「もつと近くで、ヒルダのアソコ、見させて……」

わざと強い口調で告げれば、案の定女神は困ったように羞恥の表情をうつむかせる。

「も、もう。こ、困らせないで……。ふ、ふぁッ……それなら私だって……！ ゆ、優希さんの、見せてくれたらおあいこにしてあげます……あぁん」

鼻息で胸元を、視線で股間を犯されて、腰を幾度も浮き上がらせ、小刻みに揺すりなが

ら。顔を真っ赤に染めての、女神様の驚きの提案。

「み、見たいんだ？」

抱き締めた肩のぬくもりに悦び、隙間なくくつき押し潰しあう胸奥の、お互いの鼓動の速さに驚く。期待に胸膨らみ、股間もムクリといっそう欲望を詰めて膨らんだ。

「優希さんだって見たいんじゃないですか。だ、だからおあいこなんですっ」

拗ねるみたいに頬を膨らませてうつむき、むくれた顔をすり寄せてくる彼女を、心底から愛しく思う。当然、断る理由などあるわけがない。

馬乗りのまま右回りに回転し、せわしなく身体を入れ替える間中。鼻息はますます荒く、ヒルダの二の腕やワンピースから覗く腋下、もじつく太もも、そして足裏と、順次女神の敏感な部位をくすぐり立てていく。くすぐられるたびにヒルダの身体が小刻みに跳ね、直後にくぐもった喘ぎが響いてくる、それがたまらなく興味をそそる。

やがて這うように太ももを登った視線の先に、濡れた恥毛の束が覗き見えた。横倒しにお互いの股間に顔をうずめる体勢となつて、ようやく間近に女神の股間を凝視する。

「やっぱり、すごいヒクヒク震えてる……」

間近で見た淫唇は肉厚の唇を左右にぱくりと開かせたまま、内側の小さな唇を小刻みに震わせて、溜まった蜜液を少量ずつ、染み出させるようにして噴きこぼしていた。漂う汗の蒸れた香りに甘酸っぱい蜜のにおいが混入し、たまらなく胸の奥が締めつけられる。

「そ、そんな近くでっ……ひゃう！ も、もうっ。負けませんっ……」

ずりッ！ と勢いよく、一気に下げられたズボンとトランク스에頭を引つ搔けながら、弾かれたように飛び出た肉棒がぺちんと腹を打つ。

「ひゃんっ！ な、なんだか初めての夜よりたくましくなってる、みたい……とても熱くて……はああつ、指が火傷しちゃいそうですう……」

驚いて目を見張るヒルダの鼻息が、熱くねっとりどと亀頭の先をくすぐった。

「うう……！ ヒルダこそそんなにまじまじっ、ひっ！ い、息吹きかけられたらあ！」
熱烈な視線に犯され、羞恥が胸を覆っていく。尿道口に水溜りの如く溜まっていた先走りのツユが女神の吐息に吹かれ、つつ……と幹を伝って根本にまで垂れ落ちる。

幹をニギニギと握って硬度を確認する女神の真剣な表情と裏腹のイヤらしい光景に、よりにっそう熱を溜めこんだ肉幹が脈を打つ。

「ひう！ 破けちゃいそうなくらい、脈、打って……あ!? ひゃあアアンッ!!」

反撃の意味と、自身の股間への攻撃を緩めさせるため。鼻先で揺れる蒸れた茂みへと思いきり唇を押しつけた。

「ちゅずッ！ ずっぢゆるるるっ！」

うねる肉の唇を舌で押し開き、トロリと口内にあふれた蜜の甘酸っぱさに驚かされる。なぜかしら股間をムズムズと甘く疼かせる味わい。癖になりそうな味だ、と頭の隅で思った。ヒクヒクと震える肉の感触を舌先で覚え、蒸れた蜜汁と汗とが混ざるにおいを進んで鼻腔へと吸いこむ。心臓と股間はもうバクバクと鳴りっぱなしだ。

「ひ、やああつ！ あんっ！ んっ、んん！ そっ、そんなことお……だめ、き、汚いですっ、からあああつ！」

腰をひねる女神の、半分めくれたスカート越しの尻を引き寄せて、逃げられないよう密着する。ついでに、彼女の膝下にまだ絡んでいたレース下着をさらに引きずり下ろしてしまった。右足を抜いた後、左の足首に丸まって残るショーツの妙に興をそそる姿と、爪先を反らせ悶える女神の様に、さらに肉棒がドクリと跳ねる。

「そんなことない、美味しいよヒルダのココっ……んくう……あつ……！」

堪えるみたいに力んだ女神の両手に握り締められ、根本から絞られた格好の肉棒が、苦し紛れにまた先走りを吐きこぼした。

「ふあ！ あっあああ……口、つけたまましゃべらないでっ……くううんん♥」

「ふお、あまふへ、ほいひい……んぶ、づぢゆるるるる！」

腰骨から迫り上がる肉悦を堪えているのは、こちらも同じ。負けじと舌先で複雑に折り返す肉ヒダを掻き分け、より奥へと突き入っては内壁のあちこちをツンツンとつつく。

もじつく尻を両手で捕まえ、しっとり吸いつくぬくもりと、指間からこぼれるほどたっぷりとした安産型の肉感を堪能する。じかに震わされて一斉に収縮した膣内の息苦しさにあふれる蜜汁を啜りながら息継ぎを敢行した。

「くう……うんっ……！ おなかの中までっ、優希さんの舌、うねってますうう！」

女神が左右に腰を振るたび、上へ上へとめくれたスカートがへそのあたりでよじれてい

く。徐々に面積を増す肌色に昂ぶり、こもる熱を蹴散らすようにして、膝下でとどまるズボンとトランクスを一緒に脱ぎ飛ばす。

「ちゅぶ……んぢゅうっ！ ぢゅっ、ぢゅづづううッッ！」

その勢いのまま鼻息もいつそう荒くして、膣内の形状を確かめるようにグリグリと、差しこんだ舌先を丸めてほじくり回していく。強く掻き回されるのがいいのか、膣内のヒダがしきりにざわつき、すがるように舌先に吸いついて、たっぷりの蜜を飲ませてくれる。

「お、おなかの中で響くのおっ……！ やっ、やああんっ！」

徐々に形勢は持ち直し、膣内のヒダが震える間隔も狭まってきた。もう女神の両手はただ肉棒を握り締めているだけ。我慢していた唇も徐々に開いてきて、股下の唇同様甘い声を聞かせてくれ始める。

感激して目を上げれば、視線の先にはふっくらと膨らんだ肉の丘。上部に申し訳程度に生えた栗毛色の茂みと、さらにその向こうでふっくら顔を出した、皮に包まれた突起を発見し、持ち前の好奇心と、らしからぬ悪戯心が暴発する。

「んー……ちゅぶあっ！ ヒルダ……！」

「ふあ……あん。え……？ あ、きやあああんッッ！」

ビクッ、ビクビクビクッ！

コリコリとした手触りの皮被り突起をゆっくり指腹でなでた途端、ヒルダの腰が前後に大きく弾む。プシャプシャと蜜を噴き漏らし、過剰なまでに反応を示した彼女の、吐息は

一気に艶めかしく乱れて、ワンピースの下の爆乳が合わせて縦にプルプルと揺れた。

「ココが……気持ちいいんだ。は、ア……あぶっ！」

もっと。もっと乱れてしまうヒルダが見たい。心の求めるがまま、自然と引き寄せられた肉芽に、尖らせた唇を吸いつかせる。

「はあッ……うううッ……！ ゆ、う、きつ、さあんっ！ そこはあつ、お豆、ビリビリいつ、か、感じすぎちゃいますっ、からアア……！」

口内で踊る肉豆はすぐに硬く、ぷっくりと膨らみ、次第に包皮から頭を覗かせ始めた。なめしゃぶって唾液を纏わりつかせ、徐々に、徐々に舌先で包皮をめぐり上げてやる。

「ずちゆるっ！ ちゅづづッ……んろオオ……。なら、もつろひてあふえるね、はぶっ！」
敏感すぎる性感帯を刺激されビクビク跳ねる女神の腰は、ますます激しく左右上下にくねり、腰を貫く衝撃から逃れようとする。自然と尻をもむ少年の手にも力がこもり、逃すまいと押しつけた牡の鼻息が女神の尻穴をくすぐった。

「やあ、んッ！ そ、そこはだつ、めえつ、あ、あああ……！」

「ちゅっ、ちゅづるるるッ！ んぶあつ……ちゅうっ！ ちゅちゅちゅううう……！」
顔を押しつけるようにして啜り飲んだ酸味が喉下を過ぎるたび、肉棒へと直結した鼓動が響き、エラの張った傘裏からこぼれた先走りか女神の指先へと滴っていく。

「も、もおっ……だめえつ。う、ううっ……い、いじめないでえっ……くだ、さい……」
「ッ……！」



「ひゃん！ ちょ、つちよつと暴れないでったら！ もう……っ」

ぬかるむ手のひらから滑り落ちそうな肉勃起を健気につかむ少女の、間近で覗きこんでいた右頬を思いきり肉の幹でぶっつてしまう。それでも眉をハの字に垂れ下げ、スクルドは怒るどころかどこか気恥ずかしそうなはにかみを浮かべて、肉の幹をなで扱ってくれた。

愛しさが、膨れ上がる。同時に肉棒も限界間近にまで情欲を詰めこみ、パンパンに膨張しきってしまった。

「スクルドがああまでしてるんだ。負けてはいられんな。……ヒルダ！」

「は、はい！」

凛々しき眉根をつり上げて叫んだヘルに気圧されて、ヒルダが応じる。

「誰が一番優希を気持ちよく、幸せにできるか。勝負するぞ」

「は、はい！ 負けませんっ」

(いいい!? なんか、変な方向に話がッ……あふうう!?)

元々、手コキ奉仕する少女を他二人の女神が堂々と覗いている状況自体、異常であったのだが。けれども次なる状況はさらに上をいく異常事態。少年の予想を超えた、酒池肉林の幕開けだった。

「わ、私、頑張ります、優希さん。スクルド、私も優希さんが好きだから、負けませんよ」

「ヒルダお姉さま……は、はいっ！」

「こっちもだ。私だって、優希を本当は独り占めしたくてたまらないのだぞ……ふふっ」

しゆるり、とほどこかれたポニーテールが薄暗がりには舞う。こぼれるうちのひと房を手にとった紫髪の女神は、左脇からにじり寄るや、黒下着に包まれた身を器用に少年の腋下へと滑りこませ。

手にした紫髪を少女の拳の下、肉棒の根本あたりにグルグルと巻きつけてしまった。
「ああううう！ く、くっすぐった……！」

少しざらついた感触の髪がザリザリと幹を擦るたび。量の多い髪束の、まるで筆のようになつた毛先でくすぐられるたび。刺激に食欲で素直な肉棒がむずがって、ビクビクと少女の両手の間で跳ね回る。

「わ、私も……優希さんの、ためなら」

しゆるるつ……。想い人の紅潮した顔、仲間たちの乱れる様に触発され、熱に浮かされたようにトロンと蕩けた瞳を差し向けて、右前方から栗毛の髪が迫ってきた。

「あ、あああつ！ ヒルダっ、だつ……ふくあああああ！」

ダメだと言いつ終えるよりも早く。膝横へと頭を屈め寝そべった彼女自身の手で、栗毛の長髪が肉傘のくびれへと巻きつけられてしまふ。敏感すぎて、いつも自分でする時は最後の最後に触れる部分。今ソコに、艶やかな女神の栗毛がグルグル巻きに絡んでいる。

（ひっ、あア！ ヘルの髪の毛と少し感じが違うっ……んあ、あうっ！ みつともない声、出ちやいそお……！）

ヘルよりも髪質が柔らかいのか、ふんわりと綿の中に押し包まれたみたいなの柔らかかな刺

激。しかし部位が部位だけに、感じる肉悦は根本と同等以上。頭の芯まで突き抜ける、甘く切ないものだった。

「むっ。優希、私のほうに集中しろっ……そ、そら」

しゅにつにちやにゆぢゆああっ！

「あくあッ！ そ、んないっぺん、にいっ、つくううおおお！」

ドロドロに茹だった白濁汁の溜まる根本を、縛る薄紫の髪ごとヘルの指が扱き立てる。早く吐き出したくて切なく震えるカリ首をヒルダの髪に縛られ、迫り上がった肉欲は押しとどめられたまま。マグマのように煮えたぎる欲望の塊に耐えかね、少女の両手のひらに挟まれて、ブクリと青筋を浮かせて暴れ回る。

綺麗な栗色と紫の髪が、粘る液で汚れていく。申し訳なく思うと同時に、卑しい征服欲が胸をざわめかせ、よりいっそう肉棒にズシリと甘い衝撃を響かせた。

「……優希のおちん……ぽ。わたし一人の時より全然硬く、おつきくなってる……」

すっかり萎縮してしまったのか、また肩を震わせうつつむいたスクルドの大粒の涙が、少年の腿にいくつも落ちた。肉棒から一旦顔を離し、目尻をゴシゴシ擦る。涙を見せまいとうつむく姿に、また愛しさが膨れ上がる。

「スクルド……」

気づけば、そっ、と差し出した右手で、おかつぱの黒髪をなでつけていた。

「ッ……な、なによっ。泣いてなんかいないんだからねっ。……ぐす」

予想通り激しい反応を示した彼女の涙できらめく瞳と目を合わせ、できる限りのにこやかな顔で無言の挨拶を交わす。

「優希さん……ありがとうございます。さあ、スクールド。一緒に……優希さんの、好きな男の子の幸せな顔を見ましょう？」

「余裕を見せていると、私が一人で優希を奪い去ってしまうぞ？」

年かさの女神二人がそれぞれの言葉で小さな女神に励ましを捧げる。

「だ、だいじょうぶだもん、わたしだって……頑張れるんだからっ」
すでに涙声はびたりとやんでいた。

少しずつだが積極的に少女の右手が上下運動を再開させる。

「ふふ……よし。それでは、勝負再開だ……んっ、んろおおっ……」

「ふあ！ ちよ、ヘル、よ、よだれっ……ヌッ、ヌルヌルう!? くあ、あっあくおッ！」

左腋下でもぞもぞ腰を揺すったヘルの、だらんと垂らした舌先から肉棒の根本目かけ、泡立てられた唾液がドロリ、滴った。

「こうすれば滑りがよくなる、だろう……？ んっ……ほら、ほらあ」

にゅぢゃっ！ ぬぢゅぢゅ！ にゅごっにゅぢゅごッ！

唾液を絡めたまま巻きついた紫髪がヘルの左手とともに上下し、どんどんとヌラヌラ汚れていく。唾液のぬかるみと髪の毛のざらつきとが交わり、擦り立てられた肉棒に纏わりつく感覚がたまらなく切なさを煽り立てる。

「うう……っ！ くあ!？」

知らず知らず布団から持ち上がりかけていた腰を、尻肉ごとヘルの右手で押さえこまれ、右腿のあたりに頭を乗せたヒルダの重みにも阻まれて、押さえこまれた。正面から近づくスクルドの顔も含め、ますます密着した女神たちの放つ昂揚した熱気に侵されてしまう。

「ゆ、指！ は、入って……ッッ！」

「尻穴からこうして……内側の壁を押されるとたまらないだろう。ふふっ……人に生まれ変わる前のお前にされた……お返しだ。は、あああつ……♥」

うっとりとしため息を亀頭に吹きかけた冥界の女神が、尻穴をほじりながら肉の壁をグイグイと指腹で押してきた。肉壁をじかに指腹で押される苛烈な刺激に、息が詰まる。壁越しに前立腺を引っ掻かれ、一瞬で肉の傘はブクリと膨らみ、先端の割れ目から透明の蜜を大量に噴き漏らしてしまう。

「優希さんの、おツユ。いただきます、ね……？ んちゅ、ううっ」
「んふああっ！ さ、先つちよオオオ!？」

まさに息つく暇も与えられなかった。蕩けた碧眼を潤ませ、遠慮がちに肉勃起の先に吸いついたヒルダの唇が、卑猥に窄まりチュウチュウと吸い立てる。尻穴から前立腺への刺激で痺れていたところへの追加口撃。卑しい肉棒は瞬く間に大量の先走りをごぼし、慈愛の女神の菌茎から頬裏、舌の根に至るまで食欲に己の味とおいを染みこませていく。

「ああ、ずるいぞ！ ヒルダっ……」

肛門の内部で侵入した人差し指を折り曲げ、肉壁を緩急のついた刺激で弄びながらヘルが叫ぶ。同時に、もう一人。泣きやんでしばらく姉女神たちの奉仕を観察していた小さな女神もまた、焦れたように幼い顔立ちを肉棒へと近づけてきた。

「わ、わたしも優希のおち、んちん……に、キス……したいよ……お姉さまああ」
「ちゅ、ちゅう……ええ。一緒に、優希さんに愛しさを伝えましょう」

ちようど少女一人分の場所を譲るように、ヒルダの手が左隣の少女の肩を押しやり、自身の髪が巻きつく肉傘のあたりへといざなう。

「はっ、はあッ……ス、スクールっ……ちよ、待っ——」

連続快楽で息が上がり、頭の中は白んで、ほとんど白昼夢、それも飛びきりの甘い淫夢を見ているような状況だ。待つて欲しい、と告げる前に、少女の小さな唇は唾液で濡れ光る亀頭へとカプリ、かぶりついていた。

「はぶう……ちゅ、ちゅりゅるッ……ん、んぼ、ゆ、ゆうひっ……れる、れるるう……」
懸命にしゃぶるスクルドの口がグポグポと卑猥な音を奏で続ける。泡立つ唾液と先走り掻き混ぜてできた粘液を絡め、扱かれた肉幹が切なく飛び跳ね、頬裏を抉った。

「ッッッ……!! つくはアア……ッッ」

頬を膨らませた淫猥な表情をなお蕩けさせて、目一杯吸い上げられた亀頭は縦にたわみ、溜まる欲望ごと中身まで引きずり出される——そんな恐ろしくも甘美な妄想が脳裏で仕立て上げられる。

「んろろおっ……ちゅぴ……。優希さん、すぐく幹のほうも熱く脈打って……た、たくま
しいれふ、れろっ！　ぴちゃぴちゃっ、んぶふうう……！」

その上、肉傘の裏に巻きつく栗毛髪の上からヒルダの舌が縦横無尽に攻め上がる。再び
場所を譲るようにならずにずれた少女神の唇の隣に、傘裏から這い上がるヒルダの赤い舌
が並ぶ。奪いあうように、共有するように。二つの舌で左右からなめしゃぶられ、爆発寸
前の肉勃起は翻弄されるがまま。左右から舌でつつかれるたびに震え、暴れ、止め処ない
快楽の出汁を噴き上がらせては、女神の手のひらやパジャマ、それぞれの素肌へと降り注
ぎ、淫臭を振り撒いていった。

「うう、ずるいぞ私も……！」

一人あぶれていたヘルは割りこむようにして、すでに二つの頭が寄りあう股間へと頭を
ねじこみ、紫髪の巻きつく根本へと陣取って舌を伸ばす。尻穴から指が引き抜かれ、開放
感と腸内に吹きこむ外気に怯えて軽く呻いたのも束の間。

「うひアアアっ!?　だっ、め……ソコ汚ッ……ああぐううう！」

「れるおっ……言っただである？　私のすべてはお前のもの……んっ、んっ。すう、すうっ」
冥界の女神の白い指先で持ち上げられた玉袋の裏の、蒸れた汗とただ漏れ先走り汁の
おいを——鼻を鳴らして嗅がれた。たった今尻穴から引き抜かれた、少々腸液で濡れてい
る指先が玉袋をやわたわともみほぐしにかかる。

精の噴出をねだるような緩急巧みな刺激に、腰は完全に痺れて愉悦に砕け、内ももがピ

クピクと小さな痙攣を見せ始めた。

まるで、精液を搾られているような気分だ。

(「こんなっ、こんなああっ！ ああもうッ……夢なら覚めないでええっ！))

肉の快感と熱気と三人の女神へのあふれる愛しさで、混濁する脳内で繰り返しそんなことばかりつぶやいていた。

右太ももにはヒルダの純白レーズブラに覆われた乳肉が、左太ももにはヘルの黒いスケケブラから覗く乳首がそれぞれたっぷりの質感と熱気を伴ってのしかかる。凶悪な柔らかな腰骨を伝って肉棒を刺激し、根本から迫り上がる欲望汁が、髪の毛の締めつけを跳ね除けるが如く脈動を響かせながら、発射口へと上りつめていった。

「ちゅぷあっ！ んぢゅ、ぢゅうううっ！ いいろ……？ んぷあ、髪の毛越しに感じる……ちゅ、ぢゅうううッッ！」

「くうっあアアアア……へ、ヘルうっ！」

玉袋が食べられる——とっさにそう感じて腰を引きかけて、啜られた根本からの甘い刺激に今度は逆に腰を肉棒ごと押しつけていく。

「はぷう……っ。いつでも……お好きな時に……出してくらふあいれ？ んっ……えろおおっ……れるるれるおおお……っ！」

幹の根から傘の裏までたっぷりの唾液で湿らされ、右手で巻きついた髪を器用に操り、肉傘の裏をリズムカルに締めつけてくる。ヒルダの逐一こちらの表情を確認しながらの奉

——どぼびゆううっ！　びゅぐっ！　びぐぶびびっ！　びゅびゆう！　びふっ！　ぼびびゅっびゅぐぶびびびッ！　びぢやびぢやびぢやああッ！！

「んひゃああうう！　す、すごおいっ……優希の白いの、たくさんかかっちゃって、るう」
パジャマに降り注ぐ白濁を愛しげにすくって、少女が口元へと運んだ。

「熱いです、優希さんの、子種……あっ、ああっふううう……」

顔面で吐精をともに浴びた慈愛の女神は、惚けたように赤らんだ顔を肉棒の発射口へと突き出し続ける。

「あっ……ず、ずるいぞっ。私だって……んああ……ンッ！」

根本に顔を寄せていたおかげで出遅れた冥界の女神は、あわてて顔を他の二人の脇へと並べた。その際に根本を締めていた紫髪が引っ張られてよけいに引き縮まり、痺れた肉の砲身はますますたぎって熱い飛沫を噴き上げる。

「んくうあっ、ああううっ！　と、止まらなッああぐううう！」

びゅるうっ！　びぢやっ！　びゅぐびゅぐぶびゅるる！

幸せそうに子種シャワーを浴びる女神たちの表情に、一滴残らず搾り尽くされてしまいうだ。

「に、にがああ……せーしってこんな味するんだあ……」

苦みに顔をしかめたスクルドが舌を出して、喉をこくりと鳴らした。あどけなく、なにげない仕草なのに、やたら背徳的で、汁濡れて肌に張りつくパジャマも異様に艶めかしい。

「あ、はああつ……胸が、なんだか火照って……」

精液まみれの純白ブラを己が手で押さえたヒルダが、栗毛髪から垂れる濃厚粘液を少しはしたなく、音を立てて啜って、妙に悩ましい吐息をこぼした。

清楚な彼女の、普段は見れぬ浅ましき。透けそうな乳肉を揺すって喉鳴らす女神様の剥き出しの感情の激しさが愛情の強さを示しているようで、嬉しくなって精を噴き上げる。

「あ、ああ……私だけ浴びる量が少なかつた……くう、うんッ……」

ヘルなどは浴びた白濁のおかげで黒いスケスケブラが透けて、薄桃色の乳首が覗いていた。その乳首も、心なしかふつくらと膨れて刺激を求め浮いているように見える。舌を突き出し、今にも衣服に染む液を啜り飲むと、唇を尖らせてむくれる冥界の女神はどこかあどけなさを感じさせ、逆にそれが濁液まみれの見た目の卑猥さを際立たせていた。

三女神それぞれの印象的な瞳がトロリと一様に蕩けて半開きに、悦楽の余韻に入り浸る。

「くう、あッ……！」

びゅっ、びゆるんっ……。

幼さを剥き出した少女神に己の汁でマーキングする至福。清純なる乙女を浅ましく乱れさせているという、充足感。凛々しき仮面の下の意外なあどけなさへの昂奮。三者三様の痴態に見惚れて残りカスを搾り出すように白濁を吐き、再び迫ってくる女神たちに歓喜の鼓動が股間で響く。

しみじみと思う。このまま、愛しい女神たちに囲まれた幸せな日々が続きますよう――。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索

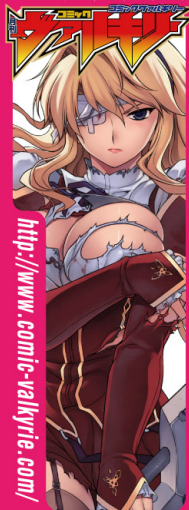


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!